

1

黒石市の景観特性

1. 黒石市の概況

1) 黒石市の概要

(1) 広域的な位置・地勢

黒石市は、青森県の中央部、津軽平野の南にあり、東に八甲田山系を抱え、浅瀬石川が東から西へ流れ、岩木川と出会っています。

広域的には、県庁所在地である青森市、津軽地域の拠点都市である弘前市、観光・レクリエーションの拠点である十和田地域のほぼ中心に位置し、県の東部から津軽地域への玄関口でもあります。

市域は、東西に約 23.3km、南北に 17.5km で、面積 216.96k m²です。



図 観光りんご園より黒石市街地を望む



(2) 人口・世帯等

①人口・世帯

人口は、昭和40年の約38,800人以降は増加傾向にあり、昭和55年に約40,800人まで伸びましたが、その後ゆるやかな減少傾向が続き、平成22年は約36,100人まで減少しています。平成17年から22年までの5カ年は6%の減少率と昭和40年以降もっとも高い減少率を記録しました。なお、第5次黒石市総合計画の将来推計人口は、平成37年には33,000人を下回るとしています。

一方、世帯数は、昭和40年の約8,300世帯以降はゆるやかな増加傾向が続き、平成17年の約11,800世帯まで増加し、平成24年は微減しています。人口の減少と世帯数の増加により、平均世帯人員は小規模化が続いており、昭和40年は4.67人/世帯でしたが、平成22年は3.06人/世帯と約1.6ポイント減少しています。

図 人口の推移（出典：国勢調査結果）

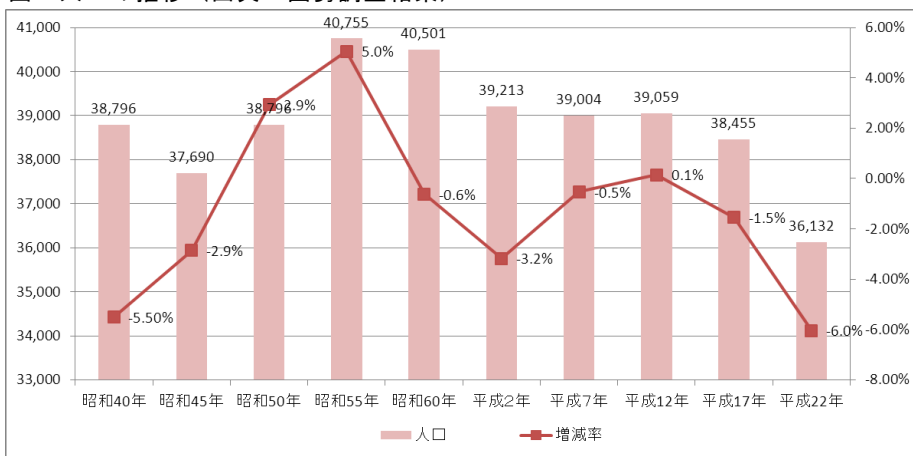


図 世帯数の推移（出典：国勢調査結果）

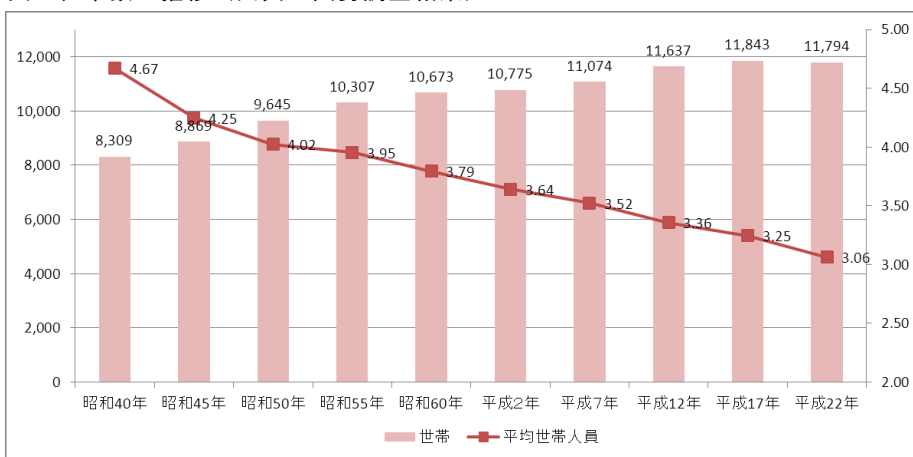


表 将来推計人口（出典：第5次黒石市総合計画） ※平成19年の推計値

年次（西暦）	人口（人）	年齢3区分構成比（%）		
		年少人口（0～14歳）	生産年齢人口（15～64歳）	老年人口（65歳以上）
平成22年（2010）	37,514	13.6	62.0	24.4
平成27年（2015）	36,199	12.6	59.8	27.6
平成32年（2020）	34,575	12.2	57.6	30.2
平成37年（2025）	32,815	11.8	56.6	31.6

②産業別就業人口

産業別就業人口は、平成7年には約2万人でしたが、平成22年には約17,500人と、約2,500人が減少しました。平成22年の就業者別の構成は、第1次：第2次：第3次の順に約16%、約24%、約60%となっています。

平成7年から22年の変化を見ると、第1次産業が約1,200人、第2次産業が約1,700人とそれぞれ減少し、第3次産業は微増減しながら概ね横ばいに推移しています。なお、平成22年度の第1次産業の内訳は、農業が約2,800人と大半を占め、林業と漁業（水産業）は、それぞれ33人、3人と少数となっています。

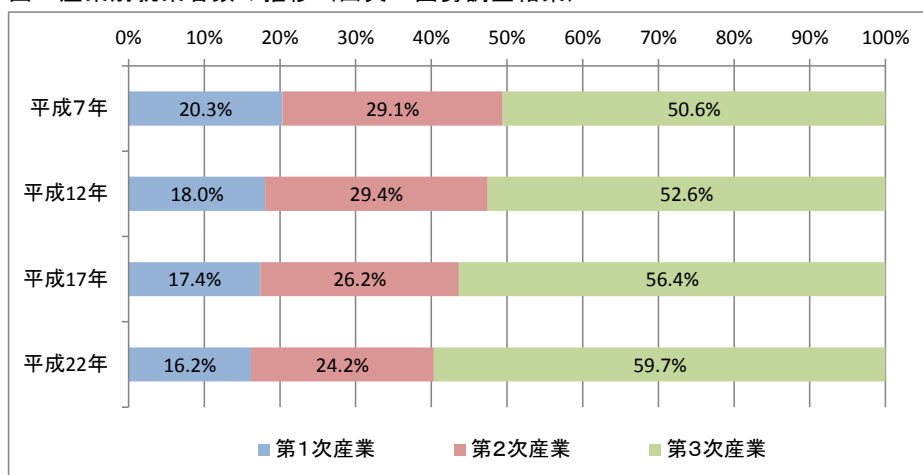
表 産業別就業者数の推移（出典：国勢調査結果）

区分	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年
第1次産業	4,072	3,653	3,355	2,840
第2次産業	5,827	5,955	5,037	4,246
第3次産業	10,136	10,650	10,845	10,486
合計	20,035	20,258	19,237	17,572

表 一次産業就業者数の推移（出典：国勢調査結果）

	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	減少率 (H7-22)
農業	3,980	3,591	3,311	2,804	29.5%
林業	85	59	43	33	61.2%
漁業	7	3	1	3	57.1%
合計	4,072	3,653	3,355	2,840	30.3%

図 産業別就業者数の推移（出典：国勢調査結果）



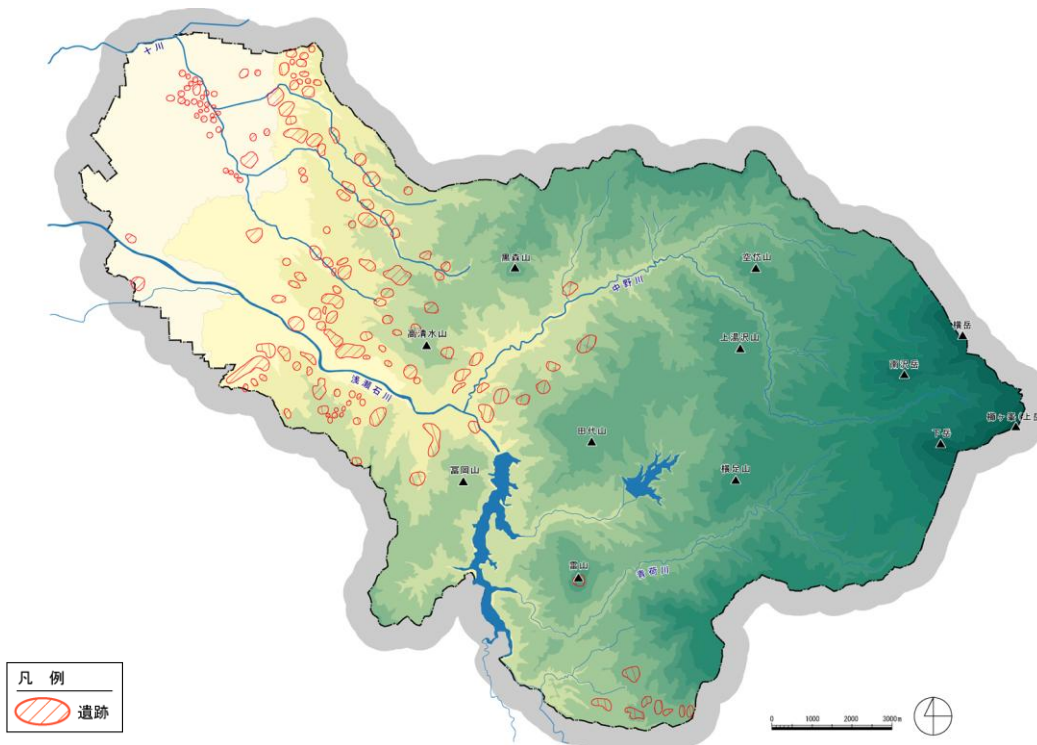
2) 黒石のなりたち

(1) 縄文時代～：集落形成

考古学的に調査された黒石の歴史は縄文時代より始まります。205カ所が確認されている遺跡は、浅瀬石川と十川の河川沿いに立地しており、地形的には河岸段丘や低丘陵地に多く分布している。飛内・二双子地区のように低い台地の水田や宅地にも確認されるなど、広範囲に集落が形成されていたことがわかります。

平安時代の津軽は、北奥の安倍一族の子孫である安東氏により支配されていたようですが、詳細は不明です。

図 遺跡分布図 出典：黒石市遺跡詳細分布調査報告書



(2) 鎌倉時代～近世：中世の津軽と黒石

近世以前は、黒石には北条氏の得宗領の地頭代として工藤貞之が境松に城館を構え、南北朝時代にも所領を持ち続けたようです。このころ、現在の黒石市域には土豪が城主として存在していたとされ、室町時代には南部氏の一族である千徳氏が浅瀬石に築城し、津軽を支配していました。千徳氏は、戦国時代に入ると大浦（津軽）為信と同調し南部氏と交戦し勢力を広めました。文禄元年（1592）に津軽氏と交戦し浅瀬石城は落城しました。同年、大浦（津軽）為信に津軽の領有・支配が認められ、大浦姓を津軽姓に改め、黒石も領有しました。慶長8年（1603）、為信は津軽初代藩主となり、黒石も津軽藩となりました。

また、天文15年（1546）の「津軽郡中名字」にも「くろいし」の名称がみえます。昔、蝦夷（えぞ）の住むところが久慈須（くじす）や国栖（くにす）と呼ばれていたことから、「くろいし」はこれが転訛したものといわれています。その他に黒石・藪虫野（牡丹平・柵ノ木）・富内（飛内）・二阜子（二双子）・長谷沢・黄蘗平（南中野・黒森付近）・目内沢田（目内沢）・野端（野際）・汗石（浅瀬石）・袋・馬音内（毛内）・熱後湯（温湯）・板留・石難坂（石名坂）・中川などの地名も確認できます。

(3) 江戸時代～：現在まで継承される村や街道の形成

① 黒石陣屋の形成：現在の市街地の礎となる城下町の整備

明暦2年(1656)に津軽信英が4代弘前藩主津軽信政を補佐したことで弘前藩から5千石を分知され黒石領が発足し、黒石に陣屋を構え、陣屋形成のための町割りを行いました。城下町の整備については、町割り以前から存在した古いまち並みに基づいて城下町が形成されたことが明らかになっており、明暦の検地帳に記されている本町、古町、おいた町、上町、徳兵衛町派、横町派、派町、浦町、寺町、新八町は以前から存在しており、また寺院の開基が明暦以前になっている5つの寺院もすでにあつたと推定されます。これらに侍町(内町、一の町)や職人町(かじ町、大工町、馬喰町)を加えて、黒石のまち並みが形成され、こみせはこのときに整備されたとされています。

文化6年(1809)に8代領主津軽親足の代に6千石が加増され1万石となり、改めて黒石藩を立藩しました。

これら黒石市中心部の町割りは、今日まで継承されており、市街地のまち並み景観の基礎となっています。

図 明暦2年6月頃の黒石町(推定図) 出典：黒石市史 通史編1

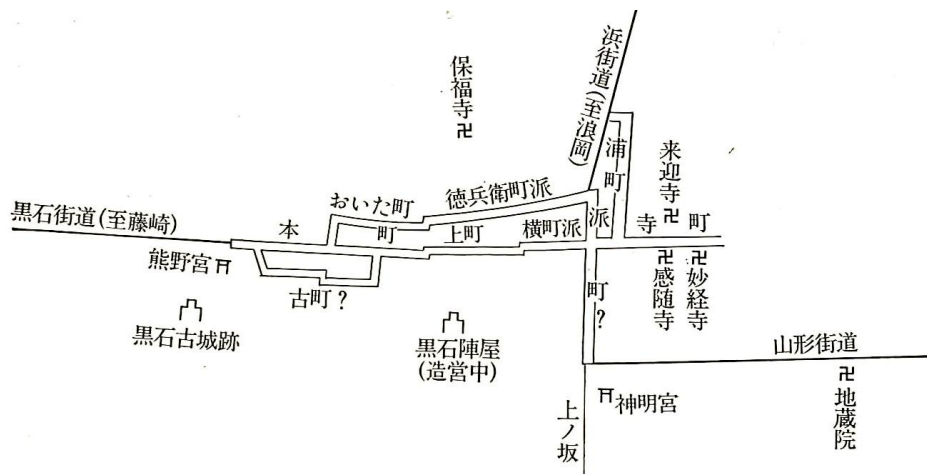
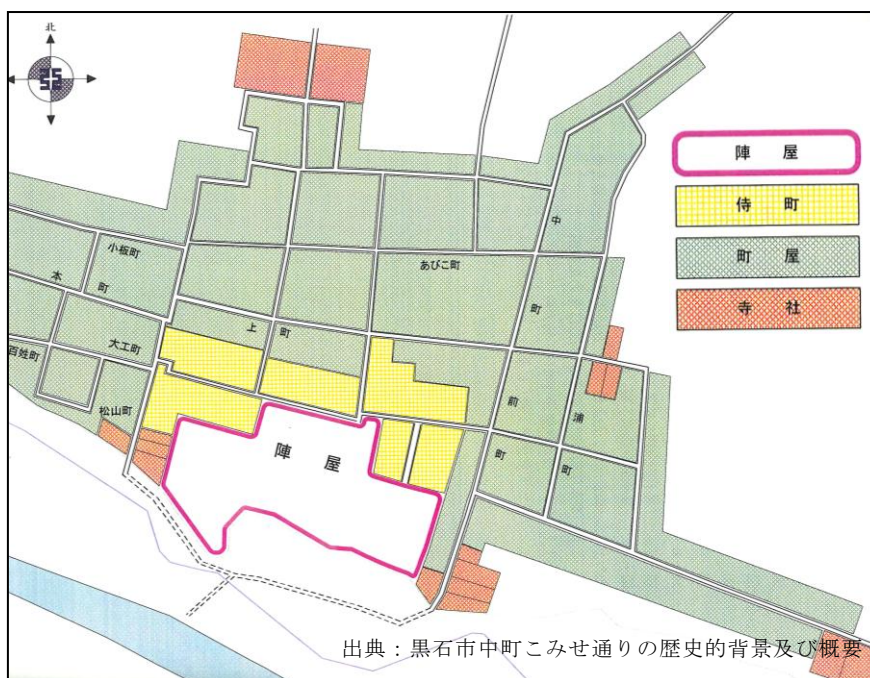


図 元禄7年(1694)当時の町割り(「御国中道程之図」に基づく)



②行楽地としての山形地区：湯治場・景勝地から黒石有数の観光地へ

黒石領分のうち山形地区は、中野村の不動堂と紅葉山、いで場の地である温湯村・板留村などを中心に、浅瀬石川に沿う温泉と景勝の地として津軽郡中に知られていました。温湯村と板留村の間、浅瀬石北岸の断崖を登る大坂道であった蛾虫坂と峠からは、大川（浅瀬石川）をはじめ、温湯村・板留村、中野紅葉山・中野川・中野村、黒森山・黒森村、袋村などが眺望でき、絶景であったとされています。大正13年（1924）に崖下の川沿いに新道が開通し、この峠道は廃止になりましたが、中野紅葉山周辺は現在でも県内有数の紅葉の景勝地として親しまれています。

また、この地は古くからいで湯の地として有名で、温湯、板留、二庄内、沖浦などは、多くの湯治客で賑わいました。なかでも、温湯は津軽郡中の名湯に数えられ、宗藩弘前藩主たちも入浴に訪れたそうです。

幕藩期から知られていた温湯・板留はその後も繁昌し、新たに青荷（大正期～）、落合（昭和6年～）などが温泉地として開業しました。昭和30年代に入り、全国的に「観光開発」が広がり、昭和32年8月「黒石観光協会」が設立され、昭和33年9月、山形温泉郷は黒石温泉郷として県立自然公園に指定され、現在でも湯治場としての歴史が感じられるまち並みが形成されています。

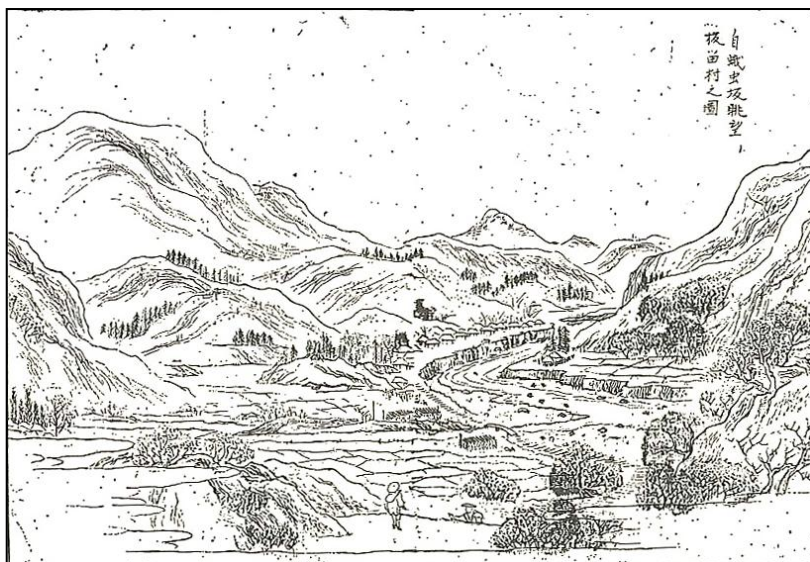


図 山形岳泉筆「蛾虫坂より眺望 板留村之図」 ※手前に蛾虫坂を上る旅人が描かれている。
出典：黒石市史 通史編Ⅰ



図 山形岳泉筆「二庄内温泉之図」 ※二庄内川の川岸に鄙びた湯小屋が描かれている。
出典：黒石市史 通史編Ⅰ

③集落と街道：城下町整備以前から形成されていた村と交通のネットワーク

元禄 10 年一（1697-）に作成された「津軽領元禄国絵図写」には、黒石村、野木和村、目内沢田村、飛内村、馬場尻村、上十川村、高館村、追子野木村、中川村、浅瀬石村、石名坂村、下目内村、山形村、温湯村、袋村の 15 村の名称が記載されており、これらの村々を結ぶ街道が存在していたことがわかります。これらは、天文 15 年（1546）の「津軽郡中名字」において確認できる地名も多いことから幕藩期以前には、多くの村が成立していたと考えられています。

また、街道についても、黒石市史記載の明暦 2 年の頃の黒石町の推定図（p. 7 に記載）には、浜街道、黒石街道、山形街道が記されており、村々を結ぶ街道が陣屋形成以前から存在していたと考えられています。なお、陣屋東側の上ノ坂は、一般の人々が黒石に入り、外ヶ浜へ向かう道筋であり、浜街道と呼ばれ、沿道に位置した中町や前町は、商人地として栄えました。

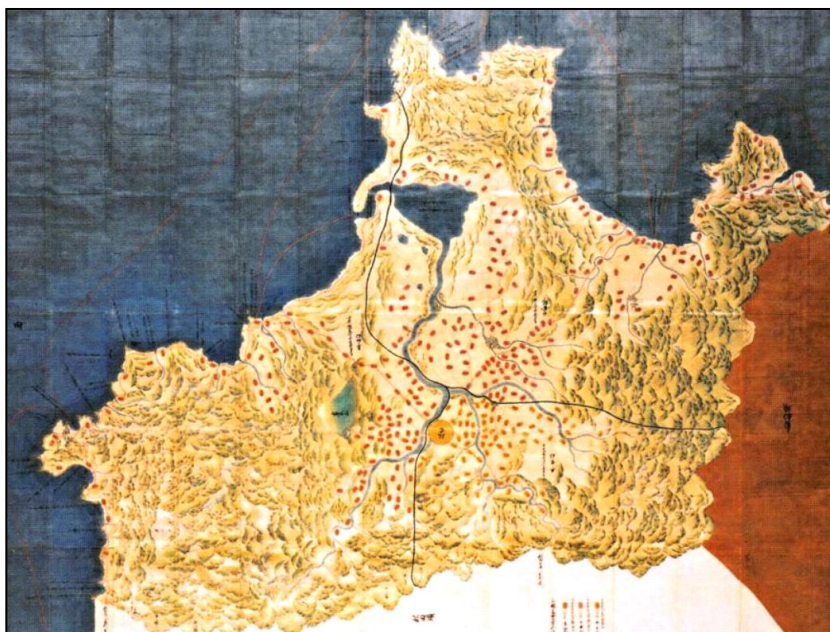


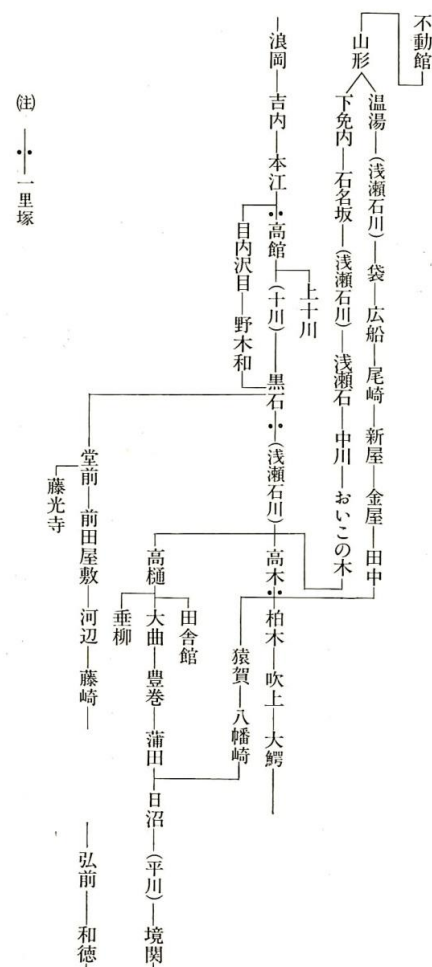
図 陸奥国津軽郡之絵図（正保国絵図写）

出典：文化庁 文化遺産オンライン (<http://bunka.nii.ac.jp/Index.do>)



図 津軽領元禄国絵図写 黒石付近（正保国絵図との相違点を書き出し、追加・修正を行わせた国絵図の写し）

出典：弘前大学付属図書館電子版 津軽領元禄国絵図写ビューア (<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/collection/rare/viewer/>)



陸奥国津軽郡之絵図に示された街道筋
※一里塚が設けられた道が「浜街道」
であると想定される

出典：黒石市史 通史編 I

(4) 明治時代～平成期：南津軽郡の中核都市の形成

①「黒石市」の誕生：南津軽郡の中核都市としての黒石

藩政期における黒石城下は、弘前城下町の補完的役割を果たしながら、黒石領域市場の中心機能を担っており、このような性格は明治以降も引き継がれました。

明治時代になり、廃藩置県を経て、郡役所がおかれ黒石町となり、黒石町は、政治・経済・文化の面で南津軽郡の中心的な役割を担っていました。大正15年7月1日に郡役所は廃止され、そのあとに黒石町役場が移設されています。

戦後は、弘南鉄道の開業や広域交通網整備にあわせるように、弘前市や青森市浪岡方面や浅瀬石川沿いに徐々に拡大し、今日の市街地となっています。

その後、昭和29年(1954)7月1日、黒石町、浅瀬石村、山形村、六郷村、中郷村が合併して黒石市が誕生しました。その後、昭和31年(1956)に尾上町の追子野木、久米、長崎の3集落が編入合併し、現在に至っています。

②津軽有数の商業地として栄えた中心市街地

江戸期に築かれた町割りは、今日の市街地のまち並み景観の基礎となっており、明治期から戦前までは、これら地域が市街地として成立し南津軽の中心地として栄えました。

特に商工業の面においては、藩政期同様に物資の集散地として、津軽地方有数の商店街が形成され、多くの人々で賑わいました。

平成期に入り、郊外型大規模小売店の進出がバイパス沿いに相次いだことや中心市街地内の大規模小売店の退店などにより、中心市街地の空洞化や商業力の低下が進行しています。近年では、この状況を踏まえ、中町の伝統的なまち並みの活用や、通りの賑わいを考える商店主を中心としたグループ(横町十文字まちそだて会)による取組が行われるなど、中心市街地の魅力を活かそうとする動きもみられます。また、藩政時代から続く旧正名物「マッコ市」は、黒石商人の心意気とともに現在でも継承され、黒石名物のひとつとなっています。

③りんごの産地としての発展

本県のりんご栽培の起源は、明治8年とされます。これは、明治新政府の欧化対策の1つである洋種果樹奨励政策によって県庁構内にりんごが植え付けられたことに起因し、黒石市では翌明治9年に有力な民間有志によって植えつけがされました。在来種に比べて、形・大きさ・味わいにおいてはるかに秀でていたことから、人々は苗木を求めては、空地や屋敷畑に植えつけ、これらの宅地栽培により、黒石各町内の裏宅地(かぐじ)はりんご園で覆われました。明治20年代に入り、それでは満足できない人々が広い土地に園圃栽培をはじめたとされています。

積極的な規模拡大の意欲はこれにとどまらず、本市の地形の特徴である丘陵地を活用して、山地りんご栽培が行なわれるようになり、昭和初期には津軽地方有数の名産りんごの産地として知られるようになりました。同時に宅地栽培のりんご園は、周辺の植物に起因する害虫や病気の被害が大きく、やむなく衰退・消滅していったとされていますが、当時の人々にとっては淋しいことであつたにちがいないと『黒石市史通史編Ⅱ』には記されており、当時の市民の暮らしの中で、りんごが身近にある風景が浸透していたことが伺えます。

④戦後の開拓事業：沖揚平の開拓

戦後の開拓は国家事業として全国一斉に開始されました。黒石では、昭和21年～昭和27年にかけて、厚目内(99ha)、高場(77ha)、沖揚平(542ha)、葛川平(100ha)、青荷沢(62ha)において入植が開始されました。森林を切り開いての開墾、住宅建設、道路開設には4～5年の月日を費やし、その間、入植者が半減するほど困難なものでした。

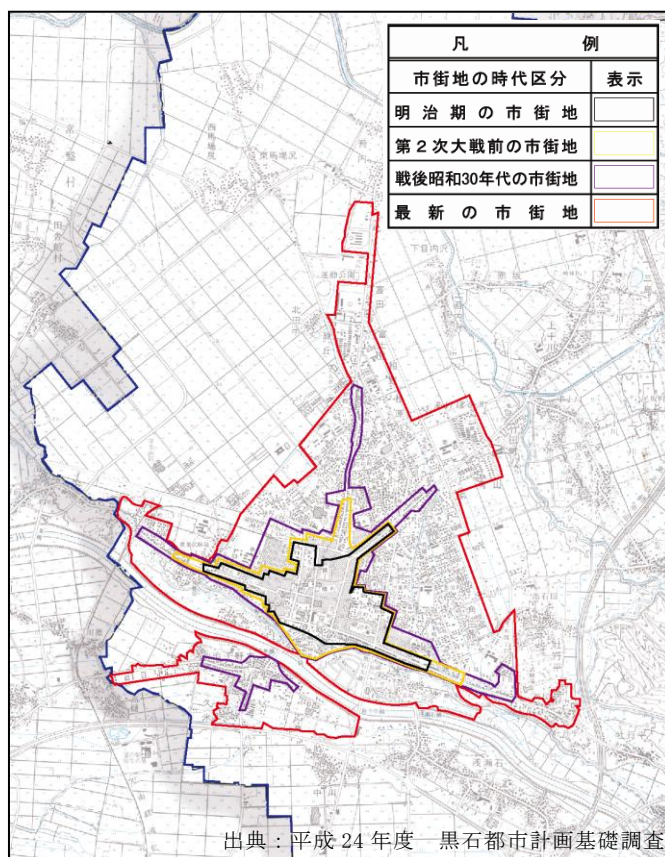
昭和35年頃、県農業試験場は高冷地野菜に着目し、栽培指導をする一方、入植者への高冷地野菜の試作、定着に力を入れました。特に、昭和23年、満州や樺太からの引き揚げ者と山形の開拓団の19戸が入植した沖揚平地区の有志の研究、試作、普及は特記すべきものであり、昭和39年から野菜の栽培試験の成果をあげ、翌年、生産出荷組合を結成し、生産物の共同販売、資材の共同購入、生産技術の普及、市場の選定等に取り組んできました。なお、野菜作付集団は県下初の国指定生産団地に指定され、現在は県内有数の高冷地野菜の生産地として高い評価を得ています。

表 黒石市略史表

年次		主要な出来事
1240	仁治元年	千徳行重、浅瀬石(現黒石地内)に築城
1656	明暦2年	津軽信英、黒石陣屋築城
1689	元禄2年	黒石当主、津軽信俗の病死で家名断絶、公領となる。
1871	明治4年	藩の廃止(黒石は弘前県と合併→青森県と改称)黒石出張所設置。
1889	明治22年	町村制廃止。(黒石町役場開庁)
1912	大正元年	黒石～川部間に鉄道開通。
1950	昭和25年	弘南鉄道(私鉄)尾上～黒石間開通
1954	昭和29年	黒石市制施行。(隣接5町村合併)
1956	昭和31年	尾上町の一部、黒石市に合併。

表 明治22年の町村制施行時に発足した村の構成 図 市街地変遷図

村名	合併した村名
浅瀬石村	浅瀬石村、中川村、高賀野村
山形村	下山形村、上山形村、花巻村、南中野村、牡丹平村、石名坂村、豊岡村、温湯村、大川原村、板留村、二庄内村、沖浦村、袋村
六郷村	高館村、赤坂村、二双子村、竹鼻村、三島村、上十川村、北中野村(一部)
中郷村	株梗木村、境松村、西馬場尻村、東馬場尻村、黒石村、野木和村、小屋敷村、飛内村、上目内沢村、下目内沢村、東野添村、北田中村



3) 景観に関するこれまでの取り組み

本市では、これまで歴史・文化をはじめとして、景観学習や普及啓発等に取り組んでいます。

表 景観に関する主な取り組み

テーマ	取り組み・団体名	備考
歴史・文化	文化財保護法に基づく文化財の指定	
	重要伝統的建造物群保存地区の指定と黒石市歴史的景観保存条例に基づく周辺景観の保全	
景観学習 普及啓発	景観学習教室の開催	青森県景観学習教室を市内小学校で実施
	水田を活用した農業体験（米っ子くらぶ）	商工会議所が主催
	くろいし魅力百選の選定	
	景観シンポジウムの開催	
	あずましい景観写真の募集 小さなまちかど博物館の認定	
景観づくり活動	浅瀬石川クリーンの会	青森県河川環境美化活動の表彰
	こみせ保存会	観光ボランティアガイドを実施
	横町十文字まちそだて会	黒石まち歩きツアーの開催 店舗の改装 くろいし食と文化のものがたり等の開催

○景観学習・普及活動



景観学習の様子



景観学習で小学生が作成した作品



米っ子くらぶの活動の様子



景観シンポジウムの様子



横町十文字まちそだて会によるまち歩きツアーの様子



浅瀬石川クリーンの会による美化活動の様子

○歴史・文化 こみせを守り育てる取り組み

本市のまちづくりの核となっている「こみせ」は、藩政期に整備されたと伝えられており、冬の吹雪や夏の日照り、雨などを遮り、歩行者を守る雪国独特のまち並みとして親しまれ、昭和 61 年の手づくり郷土賞受賞を契機に、地域住民がこみせの歴史的文化遺産としての価値や認識を深めながら、主体的にこみせを核とした様々なまちづくり活動が展開されています。

平成元年、生活に密着したまち並みに対する市民の深い思い入れを感じさせる象徴的な出来事が起きています。こみせ通りへの高層マンション建設計画に反対した 20 名の有志が建設予定地を事業者に先だって購入し、マンション計画を阻止しました。

このような想いを引き継ぎ、現在取り組まれている活動としては、「こみせを核としたまちづくり」をコンセプトに事業を行う TMO「津軽こみせ株式会社」（現：株式会社津軽こみせ）による地元物産の販売、津軽三味線の無料生演奏、各種イベントの実施をはじめ、黒石こみせ保存会によるこみせ通りの保存・修復、弘前大学との連携によるワークショップの開催、小学生の景観学習教室、黒石を愛する有志によるまち歩きやイベントの開催などがあり、多くの主体によって取り組みが展開されています。また、現在、まちなかのシンボルである旧松の湯、金平成園の整備・改修が進められているほか、中町の電線類地中化も計画されており、今後もまちなかの回遊性の向上が望まれます。

表 中町伝統的建造物群保存地区の概況

名称	黒石市中町伝統的建造物群保存地区
面積	約 3.1 ヘクタール
範囲	黒石市大字中町、浦町二丁目、大字甲徳兵衛町、大字横町の各一部
伝統的建造物（建築物）総数	42 棟
伝統的建造物（その他の工作物）総数	5 件
環境物件総数	10 件

出典：黒石市中町伝統的建造物群保存地区防災計画

図 中町伝統的建造物群保存地区の範囲



冬のこみせ通り（中町）



地元物産の販売、津軽三味線の無料生演奏などを行っているこみせ駅（中町）



平成 9 年に整備され、市民の憩いの場となっているかぐじ広場（中町）

表 こみせを守り伝える取組みの経緯

年月日	内容
昭和 48 年	高橋家住宅が、重要文化財（文部省）に指定（昭和 48 年 2 月 23 日）
昭和 61 年	第 1 回こみせまつりを開催（以後、毎年開催） こみせが「手作り郷土賞（建設省）」を受賞する
昭和 62 年	こみせのまち並みが「日本の道百選（建設省）に選定される」
平成元年	こみせ通りへのマンション建設の阻止を目的に、売却予定の土地建物を取得
平成6年	(有)商舎が設立され、こみせ駅での物販を開始する
平成9年	「総合交通体系調査」の実施、都市計画道路「前町浜町線」の見直し検討 横町かぐじ広場（ポケットパーク）を整備
平成 10 年	中町こみせ通りから横町かぐじ広場への「回遊通路」を整備
平成 11 年	鳴海家住宅が黒石市有形文化財に指定（平成 11 年 4 月 10 日） 黒石市中心市街地活性化基本計画を策定 ⇒主題：「こみせ」が輝き、「真の豊かさ」を実感できる街
平成 12 年	「こみせを核にしたまちづくり」を基本理念とした、TMO「津軽こみせ株式会社」（現：株式会社津軽こみせ）設立 「こみせ観光ボランティアガイドの会」が発足
平成 13 年	全国で初の「第 1 回火の見櫓サミット」が開催される
平成 14 年	「黒石こみせ保存会」が設立される
平成 15 年	黒石市消防団第三分団第三消防部屯所が青森県重宝に指定
平成 16 年	黒石市歴史的景観保存条例、施行規則を制定する 都市計画道路「前町浜町線」を廃止
平成 17 年	中町こみせ通りが「重要伝統的建造物群保存地区（文部科学省）」に選定される こみせが「手作り郷土賞大賞（国土交通省）」を受賞する
平成 18 年	こみせ通り地区が都市景観大賞 美しいまち並み優秀賞（財都市づくりパブリックデザインセンター）を受賞する
平成 19 年	津軽家城下町の遺産（中町の歴史的街並み）が「美しい日本の歴史的風土 100 選（財古都保存財団）」に選定される 鳴海氏庭園が登録記念物（文部科学省）に登録 黒石市中町伝統的建造物群保存地区内における建築基準法緩和に関する条例を制定
平成 21 年	日本建築学会東北大会記念事業「学生と地域との連携によるシャレットワークショップ」 ⇒全国から建築・まちづくりを学ぶ学生が集まり、中心市街地のまちづくりを提案
平成 23 年	市民フォーラム「松の湯再生に向けて」
平成 24 年	横町十文字まちそだて会結成 ⇒まちなかに第 3 の場所をつくる取組として、まち歩きツアー、店舗の改装、くろいし食と文化のものがたりなどを実施
平成 25 年	こみせ再生提案競技を実施 ⇒全国からこみせ再生のためのアイデアを募集 小さなまちかど博物館事業を開始 ⇒黒石ならではの文化や個性を体感できる建物、店などを「博物館」として認定
平成 26 年	黒石市景観シンポジウムの開催 テーマ：「みんなで育てる黒石の景観」